

ジャクリーヌ・ベルント (京都精華大学)

日本マンガの「ドイツ」：古典音楽と軍服、そして美少年

日独関係の記念の年が来ると、そのたびに文学や芸術での関連探しが始まる。「～における日本像」といったタイトルのもと、自らのうちにある他者を見出そうとするのだが、それはあたかも似たものの民族同士がお互いに向き合い、そして読者がなによりも作品から読みとりやすい内容を求めているかのようである。日本のマンガは、そうしたアプローチに対しては開かれていない。手塚治虫の初期作品から、水野英子のルートヴィヒ 2 世の物語や氷栗優を経て、日丸屋秀和の『Axis Powers ヘタリア』にいたるまで、マンガは根源的に間テクスト的に作られたメディアであることがわかる。それは、マンガが教条的な「真善美」の陰で成熟したからである。例えば浦沢直樹のリアリズム的傾向がより明確な作品であっても、パロディーの、オマージュの力が重要な役割を担っており、1980 年代にとりわけ好まれたドイツ的なモチーフ、人物、言葉の意義は、「テキスト」を個別に検討するだけでは明らかにされ得ないのである。ポップ文化としてのこれらテキストは、その本来的な効果を関係性の網目のなかで発揮するからである。いかなる「ドイツ」のイメージがマンガにおいて拡散されているのかを知るためには、非常に広く見られたナチスに結びつけられたドイツ像にしても、これが女性による、少年愛もしくはボーイズラブといったかたちでのホモセクシャルな倒錯にしても、間テクスト的な関係性の網目のなかで捉える必要がある。未来を見据えるなかで問われるべきは、今日のマンガ文化で支配的な「感情的な幻想の共同体」がどの程度まで表現内容に関心を持っているのか、そこからいかなる方法論的な要請がテキスト分析と影響研究の関係にとって生じるのか、である。

ジャクリーヌ・ベルント

1963 年生まれ。1991 年ベルリン・フンボルト大学にて美学博士号取得。1991 年度以来日本在住。1994 年より立命館大学・横浜国立大学の専任教員、2009 年度より京都精華大学マンガ学部教授（理論系）、同大学国際マンガ研究センター一層センター長、同大学マンガ研究科長、日本マンガ学会理事。研究分野：マンガの美学/感性論、近現代日本における芸術言説、アニメーション研究。主な著作：『Phänomen Manga. Comic-Kultur in Japan』[マンガという現象 — 日本におけるコミック文化] (1995)、『マン美研 マンガの美/学的な次元への接近 Towards an Aesthetics of Comics』(編・著) (2002)、など。